

# 不登校生徒への絵本を用いた面接法の試み

## ウォームアップ面接時の不登校生徒の特徴調査研究

増 田 梨 花\*

### 抄 録

筆者はこれまで、家にこもりがちな不登校生徒に対して心理的なケアを行なうにあたり、不登校生徒を家庭訪問し、1対1の面接を試みてきた。その際、筆者が初めて不登校生徒の家を訪問し、面接をした最初の面接を「ウォームアップ面接」と呼ぶこととする。筆者は初回のウォームアップ面接がとても重要であると認識している。面接では、不登校生徒との相互理解を得ること、信頼関係を確立するという目的がある。不登校生徒と筆者との間に温かい感情の交流が生まれ、安心感と信頼の中で不登校生徒が自己規制をできるだけ減らし、自由な雰囲気の中で自分の考えや気持ちをなるべく率直に表現し、互いに理解しあえるような関わりがもてれば、少なくともその後の面接で、共に居る時間や空間が窮屈なものにならずにすむのではないだろうかと考えた。筆者は不登校生徒とのウォームアップ面接の際、2つの心理クイズを実施した。心理クイズを通して不登校生徒とのラポールを形成されることを目的としたが、不登校生徒の個々の特徴を知り、今後の面接へのつながりになる情報を得ることも目的とした。今回のウォームアップ面接の結果から、不登校生徒は、自己表出が乏しいこと、完璧な答えを求めるために自分自身を追い込んでしまうこと、対人関係における緊張や不安が強いこと、柔軟性が少なく、自分の基準(ものさし)がはっきりとてないという特徴が得られた。

Key words：不登校生徒・絵本・ウォームアップ面接

### 序

筆者はこれまで、家にひきこもりがちな不登校生徒に対して心理的なケアを行なうにあたり、彼らの家を訪問し、1対1の面接を試みてきた。その際、筆者が初めて不登校生徒の家を訪問し、面

接をした最初の面接を「ウォームアップ面接」と呼ぶこととする。ウォームアップ面接では、不登校生徒との相互理解を得て、信頼関係を確立するという目的があるため、筆者はこの面接がとても重要であると認識している。不登校生徒と筆者との間に温かい情緒的な交流が生まれ、安心感と信頼の中で彼らが自己規制をできるだけ減らし、自由な雰囲気の中で自分の考えや気持ちを素直に表

\* Masuda, Rika

ルーテル学院大学専任講師

現し、互いに理解しあえるような関わりがもてれば、少なくともその後の面接で、共に居る時間や空間が窮屈なものにならずにすむと思われる。このため筆者はウォームアップ面接の際、2つの心理クイズを実施し、それにより不登校生徒とのラポール形成を目的としている。また、不登校生徒の個々の特徴を知り、今後の面接への手がかりになる情報を得ることも目的である。そこで今回はウォームアップ面接から不登校生徒の特徴を調査し、その結果に基づいて考察をする。

## ウォームアップ面接の定義・意義・目的

### 1. 面接の定義

ある不登校生徒が、「学校は僕に『学校に来るな』オーラを出している。僕は学校の中でも、特に教室の前でそのオーラを強く感じる」と筆者に表現してくれたことがあったが、このように、不登校生徒にとって、学校はなにか否定的に感じられるオーラを発しているところのようである。そこで、学校に行きたくても行けない気持ちが強く、家にもりがちな不登校生徒に対して、心理的なケアを行なうにあたり、筆者は不登校生徒を家庭訪問し、1対1の面接を試みている。その際、筆者が初めて不登校生徒の家を訪問し、面接をした最初の面接を「ウォームアップ面接」と呼ぶことにする。

### 2. 面接の意義

カウンセリングや心理療法では、カウンセラーとクライアントの最初の面接を初回面接あるいはインテーク面接や受理面接といい、カウンセラーにとってもクライアントにとっても新しい出会いの場であり、非常に大きな意味をもっている。インテーク面接には、インターカーとクライアントとの相互理解を得て、信頼関係を確立するという目的がある。

不登校生徒とのウォームアップ面接もインテーク面接と同様、2つの目的を心に留めて面接に臨むことが大切であろう。ウォームアップ面接を行

なうことによって、不登校生徒と筆者との間に温かい感情の交流が生まれ、安心感と信頼の中でクライアントである不登校生徒が自己規制をできるだけ減らし、自由な雰囲気の中で自分の考えや気持ちを率直に表現することに繋がると考えられる。そのようにして、互いに理解しあえるような関わりがもてれば、少なくともその後の面接で、共に居る時間や空間が窮屈なものにならずにすむのではないだろうか。

### 3. 面接の目的

不登校生徒とのラポールを少しでも形成し、彼らの個々の特徴を知り、今後の面接への手がかりになる情報を受け取ることを目的とした。

### 4. 面接で絵本を使用した理由

ウォームアップ面接の心理クイズ1では、絵本を提示した(図1)。これは、不登校生徒が小さい頃に手にした絵本を無意識のうちに思い出し、絵本の懐かしさに少しでも触れることができれば、彼らの心は和んで緊張感がほぐれるのではないかと考えたからである。また、心理クイズ2では、筆者が作成した布の絵本(図2)やパペット(図3)を使用した。ただ単に口頭でクイズのやり取りをするのではなく、絵本やパペットを用いることで、絵本の視覚性が不登校生徒の想像力を助け、より物語の世界に入り込みやすくなることに加え、



図1 あなたは森の中を歩いています。



図2 心理クイズ2 で使用した布の絵本（筆者作）



図3 心理クイズ2 で使用したパペット

ページをめくるたびに「次はどんな動物がでくるのだろうか？」とワクワクしたりドキドキしたりしながら、次第に絵本の登場人物に感情移入をしていくプロセスを共有したいと思ったからである。

ひと口で不登校生徒といっても、彼らは家の中にひきこもり、1日中何もすることがなく、ただ布団にこもって過ごしているわけではない。少なくとも今回筆者が家庭訪問で出会った不登校生徒たちは皆そうであった。その証拠に、不登校生徒の1日の過ごし方を不登校生徒の保護者面接にて、55人の父母に聞き取りをしたところ、不登校生徒はテレビを見たり、テレビゲームやパソコンゲームをしたり、携帯電話のサイトの検索や携帯メールのプロフィール（プロフ）を更新したりと、1日の大半を機械に向かって1人で過ごしているという結果であった。そのためか、家族との会話はほとんどなく、不登校生徒たちが人と向き合って話をする時間はほんのわずかであった（図4、図5）。

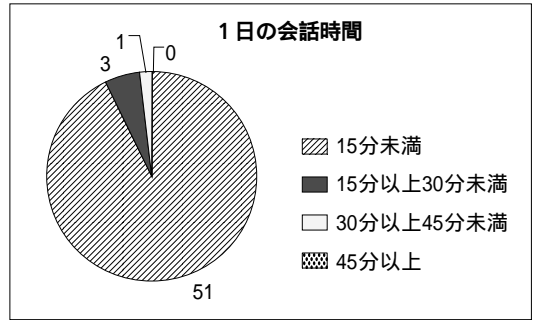


図4 筆者が関わった不登校生徒たちの1日の親との会話時間

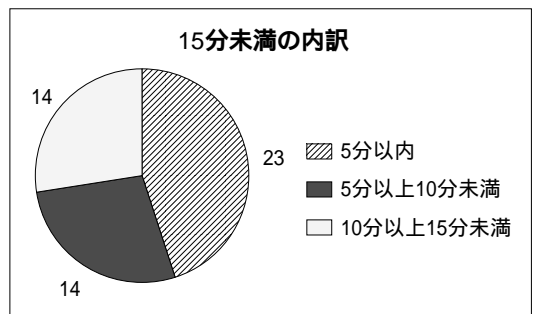


図5 1日の親との会話時間が15分未満の不登校生徒たちの内訳

そこで、ウォームアップ面接では、ゲームなどのように勝ち負けを競うような競争心をかきたてるものではなく、不登校生徒の心に響く、すなわち筆者と面と向かい対話をしながらゆったりと時間を共有することができるような設定を考えた。具体的には、筆者と初対面の不登校生徒とを繋ぐ媒介物として絵本やパペット人形を使用した。不登校生徒と筆者が共にいて安心できる空間づくりに絵本や人形たちが一役買ってくれることを期待してのことであった。

## 面接の方法

### 1. 対象

1998年4月～2007年4月。対象は東京都・神奈川県 of 公立中学校の1～3年生で、30日以上学校

を欠席した、不登校生徒81人であった(表1)。彼らは話し合いに応じられる程度に精神状態が安定している12歳～14歳で、事前に保護者と筆者とが面接をし、自宅への家庭訪問を許可していただいた。彼らを不登校生徒の群として、以下A群とする。一方、対照群(以下、B群とする)として、筆者がスクールカウンセラーをしていた東京都内の公立中学校2校の2年生、全8クラスを対象に面接の協力をお願いし、不登校ではない生徒84名(男子31名、女子53名)に協力してもらった。

## 2. 手続き

A群の生徒が不登校になって約30日が経過した時点で家庭訪問をし、以下に述べる心理クイズを2問実施した。B群の生徒に対しては、相談室に

て1対1の面接を行ない、A群と同様に心理クイズを2問実施した。図6に面接までの流れを示す。

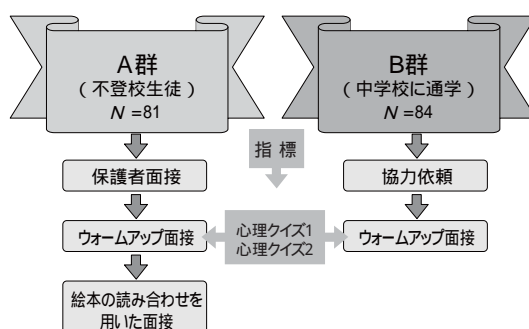


図6 面接までの流れ

表1 対象の不登校生徒

No.	氏名	性	学年	年齢	No.	氏名	性	学年	年齢	No.	氏名	性	学年	年齢
1	Y.N.	男	中1	12	28	H.I.	男	中2	14	55	A.S.	女	中3	14
2	T.A.	男	中1	12	29	Y.G.	男	中2	14	56	U.I.	女	中3	14
3	Y.T.	男	中1	12	30	M.A.	男	中2	14	57	N.A.	女	中3	14
4	A.S.	男	中1	12	31	M.M.	男	中2	14	58	S.S.	女	中3	14
5	M.O.	女	中1	12	32	K.H.	男	中2	14	59	I.M.	女	中3	14
6	K.O.	女	中1	12	33	G.M.	男	中2	14	60	A.S.	女	中3	14
7	D.S.	女	中1	12	34	Y.M.	女	中2	14	61	T.U.	女	中3	14
8	A.A.	女	中1	12	35	A.K.	女	中2	14	62	S.Y.	女	中3	14
9	Y.N.	女	中1	12	36	T.Y.	女	中2	14	63	M.N.	女	中3	14
10	S.O.	女	中1	12	37	Y.T.	女	中2	14	64	R.Y.	女	中3	14
11	M.S.	女	中1	12	38	S.Y.	女	中2	14	65	A.R.	女	中3	14
12	A.O.	女	中1	12	39	S.I.	女	中2	14	66	F.O.	女	中3	14
13	M.Y.	女	中1	12	40	E.E.	女	中2	14	67	A.T.	女	中3	14
14	A.I.	女	中1	12	41	M.H.	女	中2	14	68	S.K.	女	中3	14
15	Y.Y.	女	中1	12	42	N.K.	女	中2	14	69	O.A.	女	中3	14
16	D.M.	女	中1	12	43	N.O.	女	中2	14	70	T.A.	女	中3	14
17	T.K.	女	中1	12	44	A.I.	女	中2	14	71	E.M.	女	中3	14
18	K.N.	女	中1	12	45	O.A.	女	中2	14	72	R.K.	女	中3	14
19	Y.M.	女	中1	12	46	R.A.	女	中2	14	73	M.M.	女	中3	14
20	K.K.	女	中1	12	47	A.N.	男	中3	14	74	M.I.	女	中3	14
21	H.M.	女	中1	13	48	E.I.	男	中3	14	75	S.S.	女	中3	14
22	A.K.	女	中1	13	49	T.A.	男	中3	14	76	S.I.	女	中3	14
23	N.A.	女	中1	13	50	A.K.	男	中3	14	77	M.M.	女	中3	14
24	A.N.	女	中1	13	51	H.I.	男	中3	14	78	E.T.	女	中3	14
25	J.Y.	女	中1	13	52	R.M.	男	中3	14	79	M.N.	女	中3	14
26	T.S.	女	中1	13	53	Y.M.	男	中3	14	80	U.K.	女	中3	14
27	O.K.	女	中1	13	54	T.K.	女	中3	15	81	M.K.	女	中3	14

### (1) 心理クイズ1 アニマルクイズ

「あなたは森の中を歩いています。」(川口由貴・著, 2005)(図1)を参考にして筆者が作成したオリジナルの絵本を提示し、次の3つの質問を不登校生徒に実施する。回答に関しては、筆者が口述筆記をすることとする。

**第1問** あなたは森の中を歩いています。最初に森の入り口で出会った動物は？ それはどんな動物ですか？ 動物の前に形容詞をつけて答えてください。

**第2問** あなたは森の中を歩いています。次に森の真ん中で出会った動物は？ それはどんな動物ですか？ 動物の前に形容詞をつけて答えてください。

**第3問** あなたは森の中を歩いています。最後に森の出口で出会った動物は？ それはどんな動物ですか？ 動物の前に形容詞をつけて答えてください。

### (2) 心理クイズ2 サバイバルクイズ

筆者作のオリジナル絵本と動物のパペットを使用し、次の教示をする。あらかじめ1枚の解答用紙を渡しておき、質問が終了した時点で解答用紙に記入してもらう。教示は以下の通りにする。

教示：今、あなたは5匹の動物と一緒に砂漠にいます。砂漠で生き残るために、5匹の動物を手放していきます。手放していく動物の順番と理由を考えて解答用紙に記入してみてください。クイズに対する質問は受け付けません。自分で思うように考え、自由に記述してください。

## 3. 面接の仮説

### (1) 心理クイズ1 の仮説

杉本(2004)の研究「動物イメージ媒介法」では、被験者自らが描いた森の動物のイメージを借りて、自己のついて語ってもらうという調査から、「被験者の人間関係に対して持っているイメージや、人間関係に求めるもの、過去、現在において被験者が経験した人間関係のトラブルの内容などを理解することができた」とし、「動物イメージ媒

介法」は動物に自己を投射しやすく、「心理査定やカウンセリング場面において検査者側、被検査者側の双方に有益な技法であることが示唆された」と結論づけている。このような研究から、筆者は心理クイズで答える森の動物のイメージは、A群・B群ともに生徒が自己イメージを投射しやすく、動物の大きさや動物を形容する表現に潜在的な自己イメージが表出されてくるのではないかと考えた。また、不登校生徒数名に森の中を歩くイメージを聞いてみると、「ワクワク探検する」、「何が起こるかドキドキする」、「未知との遭遇」、「ちょっとミステリー」など、これから起こる出来事への期待と不安が入り混じったものであった。このことから、森の入り口、森の中頃、森の出口と進んでいくプロセスはカウンセリングプロセスとして置き換えることができ、さらに不登校生徒は自己イメージを現在の自分のイメージ、カウンセリングを受けている途中の自分のイメージ、そしてカウンセリング終結時のこうありたいと思う理想のイメージへと、無意識のうちに変化させていくのではないかと考えた。

### (2) 心理クイズ2 の仮説

近藤(2002)によると、不登校生徒には自己評価の低さ、あるいは自尊感情の希薄さが指摘できるという。このことから、不登校生徒は自分の価値を低く見積もってしまい、無理やりでも他人の考えに合わせたり、必要以上に他人を立てたりする傾向があるのではないだろうか。従って、「砂漠で生き残るために」という質問に対しては、「自分が生き残るために動物たちを手放していく」といったように自分を中心に考えるのではなく、「動物が生き残るために動物たちを手放していく」といったように動物を中心に考える傾向が強いと推測される。



## 面接の結果

### 1. 心理クイズ1 の結果

心理クイズ1 に対する形容詞の回答例を表2に示した。ネガティブ表現とポジティブ表現については、生徒が回答した後、「前に進む感じ」もしくは「積極的な感じ」をポジティブ表現とし、「後ろに下がる感じ」、もしくは「止まって動かない感じ」をネガティブ表現として、どちらにより近い感じがするか生徒自身に決めてもらった。

ウォームアップ面接の 心理クイズ1 の第1～3問のいずれにおいても、A群では、リスやネズミなどの小動物やカエルやカメなどの両生類、そしてアリや毛虫などの昆虫類やサルやキツネなどの中動物を回答する生徒が多くみられた。また、第1～3問のいずれにおいても動物の形容詞は、みずばらしい、きたない、みっともない、ひょろい、ださい、きもい、きしょい、毒をもったなど外見的にネガティブな表現がみられ、また、こすい、しょぼい、かすい、ぐちょい、せこいなどといった性格的にネガティブな表現が多くみられた(図7、図8、図9)。このような傾向に加え、森の入り口、森の中頃、森の出口と進むにつれて、だんだん動物の大きさが大きくなっていく(例え

ば、あり りす うさぎ)傾向がみられた。

他方、B群では、第1～3問のいずれにおいても、鹿、熊、ライオンやチーターといった中動物や大動物など猛獣系の動物を回答する生徒が多くみられた。また、動物の形容詞は、第1～3問のいずれにおいても、きれいな、かわいい、美しい、かっこいい、キュートな、たくましい、マッチョなど外見的にポジティブな表現や楽しそうな、人気者の、幸せそうな、陽気な、優しい、誠実ななどといった性格的にポジティブな表現などが多くみられた(図10、11、12)。このような傾向に加え、B群においてもA群と同様に、森の入り口、森の中頃、森の出口と進むにつれて、だんだん動物の大きさが大きくなっていく(例えば、うさぎ 鹿 くま)傾向がみられた。

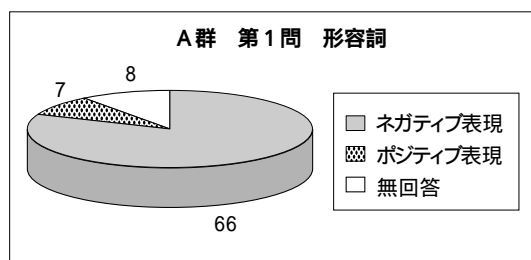


図7 A群の第1問に対する形容詞

表2 心理クイズ1 に対する形容詞の回答例 \*生徒の回答の一部を抜粋

ネガティブ表現		ポジティブ表現	
きたない	みずばらしい	きれいな	でかい
みっともない	暗い	美しい	人気ものの
悲しそう	デブい	かわいい	あいきょうのある
ださい	こすい	かっこいい	うれしそう
かすい	きもい	楽しそうな	かしこい
きしょい	ぐちょい	明るい	さわやかな
悪い	弱い	キュートな	幸せそうな
ずるがしこい	しょぼい	すごい	上品な
にぶい	けちな	色(白いなど)	陽気な
ずるい	せこい	強い	立派な
ひょろい	あやしい	たくましい	おだやかな
(足が)遅い	いいかげんな	マッチョな	優しい
いばった	いたい	えらい	誠実な
うそつきな	きどった	ごつい	利口な
なまけものの	しつこい	(足が)早い	フワフワした
かれた	残念な	大きい	やわらかそうな

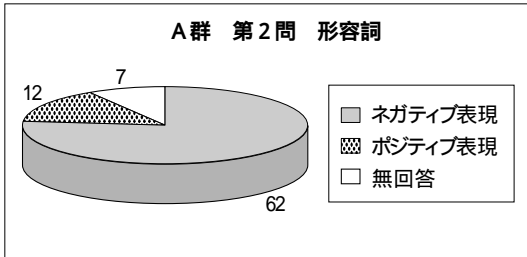


図8 A群の第2問に対する形容詞

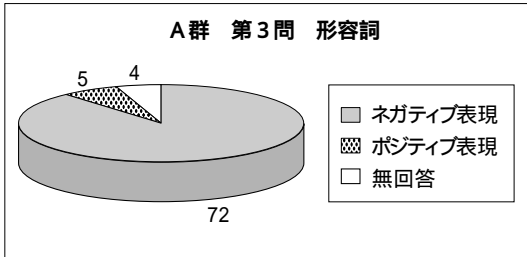


図9 A群の第3問に対する形容詞

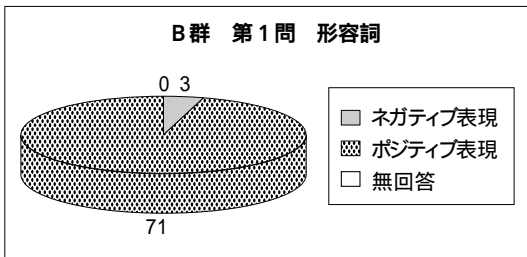


図10 B群の第1問に対する形容詞

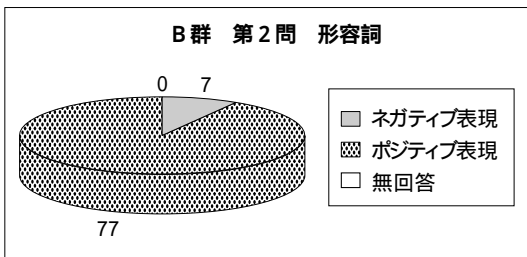


図11 B群の第2問に対する形容詞

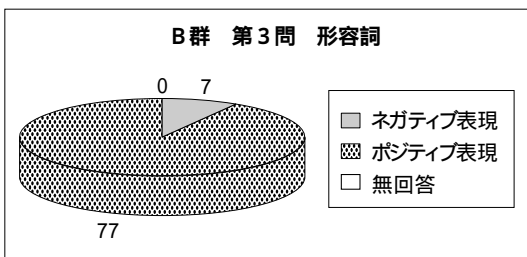


図12 B群の第3問に対する形容詞

## 2. 心理クイズ2 の結果

ウォームアップ面接の心理クイズ2において、A群、すなわち不登校生徒は、「砂漠で生き残るために」という問いに対して、まず「動物たちが生き残るために、動物たちを手放していく」という思考のもとで回答する生徒が全体の約7割もみられた(図13)。例えば、ある不登校生徒の回答は、「ライオンは強いから生きていけるので、1番最初に逃がす。馬は自分で駆けていけるので2番目に逃がす。牛もゆっくりだけど、なんとか自力で砂漠から脱出できそうだから3番目に逃がす。猿と羊は最後まで迷うけど……やっぱり猿は1番弱そうだから、私が最後に抱いて逃げるかな……」といったような回答をする傾向がみられた。これを仮に相手軸型とすれば、一方でB群は「砂漠で生き残るために」という問いに対して、まず「自分が生き残るために、動物たちを手放していく」という思考のもとで回答する生徒が全体の約6割であった(図14)。例えばある不登校ではない生徒の回答は、「猿が1番役立たずだから、まず最初に手放し、羊は砂漠で暑苦しいから、2番目に手放す。そして、ライオンも強いけど役立たずだから3番目に捨てる。最後に馬か牛……馬は馬肉が取れるし、乗っていけるけど、牛は肉もミルクも取れて、なおかつ乗っていけることを考えると……4番目が馬で5番目が牛かな!」というような回答をする傾向がみられた。これを仮に自分軸型とする。また、B群回答の中には、時には自分の立場に立って考え、時には動物の立場になって考えられる混合軸型が約2割であった。ある不登校ではない生徒は「ライオンは他の動物を食べちゃいそうなので、1番初めに逃がす。次に羊はとろくて邪魔なので、羊は2番目に捨てる。次は馬かな?自分で駆けていって砂漠を脱出できそうだから。そして牛かな?ミルクとか肉とか、結構役に立ちそうだから……最後は猿かな?1番自分に近から、話し相手になってくれそうな気がする」と、混合軸型の回答をしていた。

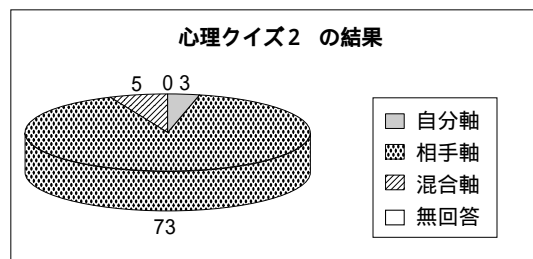


図 13 A 群の 心理クイズ2 の結果

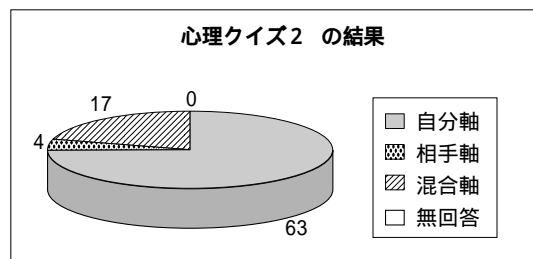


図 14 B 群の 心理クイズ2 の結果

## 面接の考察

以上の結果から、ウォームアップ面接において、不登校生徒にいくつかの共通した特徴を見出すことができるように思われる。それは、自己表現が乏しく、自分の思っていることをなかなか言葉にして表現することができないこと、不登校生徒の表現方法がいじめにあった経験など人間関係のトラブルで心の中に深い挫折感や劣等感があり、自尊感情が低いことからネガティブな表現をしてしまう傾向があること、人との関わり方に自信がないため、必要以上に他人に気を遣ってしまう傾向があること、個人の意識が内的基準よりも外的基準に向けられており、外から観察される自己の側面に価値を置いている傾向がみられること、容姿や容貌や外的行動など他者の視点から見た「公的自己」に注意や意識が必要以上に向けられていることである。そこで、この分析結果について、不登校生徒の特徴と併せて以下に考察してみる。

## 1. 心理クイズ1 の考察

### (1) 自己表出の乏しさととの関連性

B 群には無回答の生徒が 1 人もいなかったのに比べ、A 群には無回答の生徒が数人いたことから、不登校生徒はなかなか自己表出が難しいとともに、「こんな答えでいいのだろうか?」と過剰に考えすぎてしまう傾向があるのではないだろうか。また、B 群は楽しい雰囲気に取り組んでいる生徒が多いのに比べ、A 群のほとんどの生徒はとても真剣に取り組んでいる様子であった。さらに、A 群の生徒は自分で答えた後に、「あってる?間違っていない?」と筆者に尋ねてくることが多く、生真面目で完璧な答えを求めるがゆえに動けなくなってしまう生徒が多いのではないかと思われる。

### (2) 自尊感情の低さとの関連性

B 群は小動物よりも中動物や大きな動物を表現する生徒が多く、形容詞もポジティブな形容詞を使用する生徒が大半であった。ところが、A 群は小動物や両生類、昆虫など弱くてエネルギーが少ない動物を表現する生徒が多く、しかも形容詞はネガティブな表現をする生徒が多かった。動物が自己の投映された像だとすれば、A 群の生徒は「つまらない自分」や「できない自分」が表現されているのではないだろうか。思春期は自分に対する理解や認識を確立していく時期であると同時に、自分に対する理想像と現実の自分とのギャップに気づき、両者の溝を埋めようと努力したり、折り合いをつけたりしながら自分づくりをしていく時期である。A 群の生徒は「できない自分」や「つまらない自分」が膨らみ、自己評価が低くなり、自尊感情を低くしている傾向があるのではないだろうか。

## 2. 心理クイズ2 の考察

### (1) 対人関係における不安や緊張との関連性

「砂漠で生き残るために」という問いに対し、A 群の生徒の 7 割が「動物が生き残る」のが優先と考えていた。このようなことから、不登校生徒は自分の気持ちよりも相手の気持ちに合わせすぎて



しまう傾向があるのではないだろうか。自分よりも相手を優先してしまうことで、自分に対する肯定的な感情を持つことが難しくなってしまうと思われる。自分を肯定的に見ることができないと、自分に自信が持てず、「人にどう思われるか？」という他人からの評価ばかり気になり、不安や緊張が増してくる傾向があるのではないだろうか。

(2) 「内的基準」の乏しさと柔軟性との関連性  
「砂漠で生き残るために」という問いに対し、A群の生徒の7割が「動物が生き残る」のが優先と最終的には考えたが、A群はB群に比べ、動物を手放していく順番を決める基準がなかなか見つからず、答えを出すのに時間がかかる生徒がほとんどであった。「質問は受け付けません」という提示を最初にしたにもかかわらず、不安な面持ちで、「基準はなんですか？」と質問してくる生徒が数人いた。A群はB群に比べ、基準（ものさし）を探すのに時間がかかっている印象を受けた。これらのことから、A群の不登校生徒は、ものごとを柔軟に考える弾力性が乏しく、ものごとを決まったものさしにあてて見ることはできても、自由にものさしを作り出し、自分で基準を決めるのは苦手であると思われた。

(3) 「公的自己意識」とのバランスの関連性  
A群の生徒はB群の生徒に比べて、クイズに答えている態度が「真面目なよい子」の雰囲気の生徒が多くみられた。「きちんと答えなくては」という思いが強いのか、クイズ終了時の疲れ具合がB群に比べて大きいように思われた。出された宿題や予習・復習がきちんと終わっていないと翌日学校に行けない、少しでも遅刻しそうになると家を出られなくなるというような不登校生徒をこれまで見聞きしてきたが、不登校生徒はそのような公的自己意識が強すぎるがゆえに自らを縛り、縛りから抜け出そうともがいてもなかなかうまくいかず、抜け出せないがゆえに自分を壊してしまう傾向があるのではないだろうか。

## 総 括

### 1. ウォームアップ面接の必要性

スクールカウンセラーであれば、おそらく誰もが家庭訪問を経験しているであろう。しかし、初めての家庭訪問の際にウォームアップ面接としての意義があることを意識しているカウンセラーはそれほど多くないように思われる。無論、不登校生徒とカウンセラーが最初に出会った時からすぐにカウンセリングが始まるわけではない。最初は「この人どんな人？家に来てもらって大丈夫なのかしら？」、「この子どんな子？私で大丈夫かな？」といわゆるアセスメントのようなものをお互いに無意識のうちにしているのではないだろうか。カウンセラーはウォームアップ面接を通して、これから始めようとするカウンセリングの切り込み口を探し、一方の不登校生徒も、これから始まりそうなある意味押しかけのカウンセリングに自分が適応できるか否かを考え、躊躇していることもあるであろう。その際、筆者が試みた 心理クイズなどを切り込み口とすることで、不登校生徒の心の緊張が解け、より自由な自己開示が可能になると思われる。

### 2. ウォームアップ面接の重要性

ウォームアップ面接は、不登校生徒とカウンセラーとが信頼関係を確立するための重要な面接である。カウンセリングはプロセスが大事であり、カウンセリングの進行や成り行きに気を配るのはもちろんのこと、その背後にある不登校生徒とカウンセラーとの関係性も重要である。従って、不登校生徒とカウンセラーとの間に温かな情緒的な交流があり、安心と信頼の中で不登校生徒が自己表出していけるようにカウンセラーが配慮することが大切であろう。そのために、筆者が試みた 心理クイズ などを用いた面接をすることによって、カウンセラーは不登校生徒に対して積極的に関心をもつようにし、彼らの特徴などをできる限り把握し、受容していくことが重要であると考えられる。

## 引用文献

近藤卓 (2002) 不登校と社会的ひきこもり 倉本英彦 (編) ほんの森出版  
杉本沙由理 (2004) 「動物イメージ媒介法の調査から動物遊戯画の描画形成の傾向と動物イメージ」『山口大学心理臨床学研究』4, 59・68.

## 参考文献

粕谷貴志, 河村茂雄 (2002) 「学校生活満足度尺度を用いた学校不適應のアセスメントと介入の視点 学校満足度尺度と欠席行動との関連および学校不適應臨床像の検討」『カウンセリング研究』35, 116-123.  
河村茂雄, 武藤由佳, 粕谷貴志 (2005) 「中学校のスクールカウンセラーの活動に対する意識と評価 配置校と非配置校の比較」『カウンセリング研究』38, 12・21.

堀内聡, 真仁田昭 (編) (2003) 「子どもをとりまく問題と教育(第7巻) 不登校」開隆堂出版株式会社  
石川瞭子 (2001) 「不登校に対する臨床心理士の新たな取り組み」『現代のエスプリ』407, 73・82.  
松居直 (2002) 「NHK人間講座 絵本のよここび」日本放送出版協会  
文部科学省 (2006) 学校基本調査  
文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2003) 不登校問題に関する調査研究協力者会議報告書  
森田洋司 (1991) 「不登校現象の社会学」学文社  
村中李衣 (2002) 「子どもと絵本を読み会おう」ぶどう社

# An experiment using picture books during interviews with chronically Absent students

Research and investigation of chronically absent students at the time of the “warming-up interviews”

Rika, Masuda

In taking psychological care of chronically absent students who are apt to shut themselves up in their room, I have called on them and tried to have a one-on-one interviews with them. The first interview is always student's home, and I call this the “warming-up interview”. Of course this interview is of great importance. The purpose of the interview is for mutual under-standing between myself and the students as well as establishment of mutual trust. I discovered that nice an atmosphere of freedom and mutual understanding was established, the students were able to express them-selves freely. I gave two psychological quizzes at the time of the warming-up interview. Though these quizzes I aimed at creating rapport between us. So that the students felt free to express their individual personalities. It is found from the result of this warming-up interview that they are rather poor at expressing themselves, the perfect answer causes them to drive into a corner, they feel too much strained and uneasy in the personal relation, and their flexibility is too little to have their own clear standard. Then I make a report of my study on their personalities from the results of the Warming up interviews.

KEY WORDS : chronically absent student, picture book, warming-up interview